
雪がとけたら

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪がとけたら

【Nコード】

N9726F

【作者名】

桂まゆ

【あらすじ】

雪が溶けたら何になる？そりゃあ、雪が溶けたら最悪でしょう。そう答える女の子の物語。我ながら似合わない話を書いてしまいました。

雪が溶けたら何になる？

ちよっとした街頭アンケートに呼び止められた。

「雪が溶けたら何になると思いますか？」

「水？」

と、答えたのは多恵だった。

じゃああなたは どう思いますか。

聞かれて、私はどうしようかと考える。思った事をそのまま答えると、周りの人間に「変な奴」だと言われそうなのがしたので。

「私も水だと思います」

そう答えた。

「じゃあ、本当は何て思ってたんだよ」

と、潤が聞く。

「雪が溶けたら、汚くなる」

私の言葉に、潤は少し戸惑ったようだ。

私は苛立たしげに繰り返す。

「雪が溶けたら最悪だ。むかるむし、跳ねは上がるし。シャーベツト状にかたまった泥色の雪なんて汚い以外の何ものでもない」

新雪は大好きだ。

新雪に足跡を付けるあの快感。それでも勿体なくてはじっこの方を歩いたりして。

でも、次の日は最悪だ。出来れば外を歩きたくない。

潤は、声を上げて笑った。

「それは、都会の人間の言葉だなあ」

「それ、嫌味？」

上目遣いに潤を見上げる。

自分が住む街が決して都会とは呼べない事ぐらい解っている。

「ごめんごめん、間違えた。三方を山で囲まれた雪が少ない地域に住む人間の言葉だ」

「うんうん。それを一言で言えば盆地って言うんだよ。ひとつお勉強になりましたね」

つつい茶々を入れる私に、潤は「いちいち揚げ足を取るなよ」とむくれる。

ツッコミは文化のひとつだと言うのに――この街に来て三年目の潤はそのあたりがまだ解っていない。

「で、潤は何が言いたいのよ。雪が溶けたら？」

「雪が溶けたら、春になるんだ」

なるほど。その手があったか。

「上手い、座布団一枚」

「いや、真面目な話」

と、潤が頭を掻く。

「雪が一日で溶けるのが当たり前だから、汚くなるのが気になるんだよ。俺の実家、本当に田舎だから。冬になると雪深くて。多分美香なんか想像もつかないような世界だと思う」

さすがにそう言われるとむっとした。

そりゃあ、雪深い場所に住んだ事なんかないけど。テレビとかで見たこともあるし、雪深い場所に力二を食べに行った事だってある。勿論信州にスキーに行った事もある。

そう言うつと潤はいきなり、黙りこくる。

あら、怒っちゃった？

「じゃあ、住んで見る？」

言われて、私は思いつきり首を振った。

「無理。あそこは遊びに行くところであって、私が住める場所じゃない」

あんなに雪深い場所では、車を出すのも私には無理だ。きっと何処にも行けない。

私の返事に、潤は「そっかあ」と肩を落とす。

あれ？

「でも、そういう事。美香は雪に閉ざされた事もないし閉ざされる気もないから、雪が溶けたら春になるっていう感性が解らないんだろ？」

そりゃあそうでしょうとも。

って、なんで喧嘩してるんだ？ 私たち。

感性が違うから？

仕方ない。ここは私が大人になろう。雪に閉ざされた気持ちを想像しよう。

降り積もる、雪。毎朝雪かきしなければすぐに玄関が埋まってしまふ。雪に閉ざされると、私は外に出られない。仕事に行くのに困るし、買い物だって困る。

今でも出稼ぎとかあるのかな。冬になると男の人は杜氏さんとかやってるのかな。

そういえば北海道は雪がなくなるとすぐに花が咲き始めるんだったかな。

黙ってしまった私に、潤がちょっと心配そうな視線を向けて来る。仕方がないので、私は笑顔を見せてあげた。

「とりあえず、頭の中で雪が溶けると春になるかというシミュレーションをしてみたんだけど、途中から古い歌がずっとリフレインし続けている状態」

潤が笑う。

「やっぱり、こっちでは雪がとけても春は来ないわ」

それが私が出した結論だった。

「二月堂のお水取りが終わったら春が来るんだ」

それ、ものすごく解りにくいぞと潤が笑った。

だったら見に行こうよと約束した。

春になったら潤のご実家に挨拶に行こうかな。まだ早い？

「順序が逆だし」

潤が言った。

一昨日満開を迎えた桜の花びらが、強い風に舞う。

扉を開けたとたんに玄関に舞い込んで来た桜の花びら。

私はつられたように外に出る。

舞い落ちて、舞い上がる。花吹雪。

咲く時もおもいきり咲いて、散る時もおもいきり散る。

そんな潔さを持っている、春の花。

（私が言った通りだったでしょ？ 雪が溶けても春にはならないって）

私は、誰もいない左となりで心の中で語りかける。

そう。彼がいなくても、季節は巡る。

私の中の雪が溶けなくても春は来る。

降り注ぐ花びらの中で、私は春の日差しを思いつきり受け止めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9726f/>

雪がとけたら

2010年11月12日07時26分発行